

Series

もうひとつの まち
都市 の中へ 1

松本コウシ

Visions of a still night
「続・眠らない風景」より





Profile

松本コウシ Koshi Matsumoto

1961年広島生まれ。
大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。
夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」
「ウイークエンド」「記憶への旅」「肖像権」などの著作がある。
日本写真家協会・日本写真協会会員。

眠らない街へ、オレンジ色に染まる風景

夜になると街は光にあふれていました。写真にとって光はなくてはならないもの。煌々と輝く夜の光たちは、さながら昼間の太陽のように大切な存在となり、闇を照らします。そのためでしょうか、僕は光に対しては、いつも敏感になってしまふ。

10年以上、僕は、夜の光が醸し出す空想と現実との狭間の中で彷徨ってきました。人工的な光によって四方八方から照らされた夜の風景たちは、不思議さあまりなく、そして怪しげな何かを秘めています。

ここ数年、夜の街の色が変わっていつているのに気づかれたでしょうか。夜を演出する光の主人公は水銀灯。この水銀灯が少しずつなくなっているのです。新しく街を彩っているのは、最近よく見かける派手な色をした光のナトリウム灯。トンネルによくあるあのオレンジ色の光です。

なぜだか未来を感じさせるあの発色。今でもそうですが、子どもの頃、高速道路のトンネルに入ると、オレンジ色の光たちが矢のように背後に通り過ぎていき、まるでタイムマシンに乗って未来に向かっていているような気分にさせてくれました。現在、近畿都市圏の幹線道路や街並みを照らす街路灯の半数以上はこのナトリウム灯に変えられているそうです(地域により差があります)。そして、今後、水銀灯のある場所でも、電球が消耗した時点でナトリウム灯に変えられていくようです。

俳句や短歌にもよく詠まれてきた情緒的な静物、水銀灯。ぼつりと一本伸びている様は孤独や過去をイメージさせ、また雨上がりの草木に着いた水しぶきを冷たく照らすその光が、昼間の暖かいイメージの太陽と比較されて詩におりこまれることも…。今、新たにオレンジ色に照らされることで、街の片隅にある、ささやかな風景たちの貌も少しずつ変わろうとしています。

家路へと続く歩道橋の向こうで迎えてくれるいつもの光は、はたして、暖かな未来色したナトリウム灯だったでしょうか、あるいは、過ぎ去った記憶を思い出させる水銀灯だったでしょうか？

(水銀灯よりナトリウム灯のほうが経済効率が良いため、順次取り替えられていっています)